

令和元年6月13日現在

機関番号：32518

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03051

研究課題名（和文）都市祭礼における「競技化」の民俗学的研究

研究課題名（英文）Folkloristic Studies on the "Competition" in Japanese Urban Festivals

研究代表者

阿南 透（Anami, Toru）

江戸川大学・社会学部・教授

研究者番号：50255204

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本の10の都市祭礼を「競技化」の観点から研究した。競技化には、作品や踊りの出来映えを採点し評価する、採点競技化のタイプと、神輿や山車のぶつかり合いを、場所、時間、規則を定めて行うタイプがあることが明らかになった。一方で、喧嘩祭の異名を取りながらも競技化を志向しない祭礼も存在することから、すべての祭礼が競技化を志向するわけではない。しかし行政や警察との折り合いを付け、暴力に対する社会的批判を克服して祭礼を発展させるためには有効な方法であることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

祭礼における事故や暴力を克服し、「競技化」していく過程を明らかにすることは、儀礼に見られる暴力的側面の学術的意義を明確にすることにつながる。また、現代社会において祭礼に対する批判を克服し、祭礼が存続し発展する上での指標となりうるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we studied 10 urban festivals in Japan from the viewpoint of "competition". It was revealed that there are two types of "competition". One is scoring and evaluating the performance of works and dances, the other is a type that makes collisions of Mikoshi or float with place, time and rules. On the other hand, there are festivals that do not aim at competition while taking on the nickname of the "fighting festival", so not all festivals are oriented to competition. However, it became clear that it was an effective way to improve the festival by overcoming social critiques of violence, in coordination with the administration and the police.

研究分野：民俗学

キーワード：都市祭礼 競技化 審査 喧嘩祭

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究に先立って科学研究補助金を受領した研究「祭礼における「暴力」の発生と解決の民俗学的研究」(平成23~26年度)において、祭礼において喧嘩が頻発したり、山車をぶつけるなど「喧嘩祭」の異名を取る祭礼の実態を調査し、暴力がどのように解決されるかを明らかにした。個人的な喧嘩については、謝罪と補償により関係修復に至る一定のルール「祭礼内の論理」が存在したが、そういった仕組みが機能なくなると、条例や警察力による規制といった「祭礼外の論理」が必要になり、やがて祭礼自体が暴力を回避する方向へ変化していることを明らかにした。また、暴力を一定のルールで統御しながら力を発揮・発散させる「競技化」の方向に進む祭礼があることを示した。こうした研究成果を踏まえて本研究を開始した。

2. 研究の目的

暴力や事故、それに伴う批判など、祭礼における諸問題を解決する手段の一つとして「競技化」という方向性が示されていることを明らかにする。このことで、暴力が抑制されるとともに、力を発揮する方向性が示され、参加者の結集にも効果的であること、祭礼が発展し、観光にも道を開いている場合がある。こうした過程を明らかにすることを研究の目的とした。

3. 研究の方法

研究期間中、対象とする祭礼を毎年観察するとともに関係者に取材した。また戦後の祭礼資料を収集した。具体的には、YOSAKOIソーラン祭り(北海道札幌市)、青森ねぶた祭(青森県青森市)、角館の祭り(秋田県仙北市)、くらやみ祭り(東京都府中市)、伏木曳山祭(富山県高岡市)、福野夜高祭(富山県南砺市)、となみ夜高まつり(富山県砺波市)、森の祭り(静岡県森町)、灘のけんか祭り(兵庫県姫路市)、高知よさこい祭り(高知県高知市)などを対象とした。

4. 研究成果

本研究では、競技化を2つのタイプに分けて研究を行った。

第1に、祭礼における出し物や造形の出来映えを審査員が審査し採点する、いわば採点競技化した祭礼がある。青森ねぶた祭では、戦後すぐ審査が始まったが、参加するすべてのねぶたを3段階に等級づけるといったものであった。ところが1962年から、審査員の合議により最優秀の1団体に「田村磨賞」を授与する制度が出来上がった。1977年からは2位の賞(現在の知事賞)や部門賞が徐々に作られた。こうした審査と表彰の仕組みが、ねぶたの造形や囃子の演奏、運行形態などの競争を刺激し、レベルアップにつながるとされている。なお、1994年には審査員の中に一般審査員を加え、各審査員の得点を合計する方式に変わった。現在は30人以内の審査員がつけた得点を合計して順位を決めている。

よさこい祭りでは、1954年の開始以来、躍りの審査をすることはなかった。しかし1991年に前夜祭で審査が始まる。競技化に拍車を掛けたのが、札幌YOSAKOIソーラン祭りの開始(1992年)とその全国的影響力である。YOSAKOIソーラン祭りは当初から、コンテストとしてスタートした。このことから高知のよさこい祭りでも、試行錯誤を経て1998年からはコンテスト色を明確にした。ちなみに札幌のYOSAKOIソーラン祭りでは、上位10チーム程度の決勝戦(ファイナル)の他、それらに次ぐ10チームほどによるセミファイナルを設けるなど、審査方法を年々複雑にしている。

これらの祭礼においては、採点方法を厳密にし、明確にすることで、審査の権威を高め、意義の出にくいものにしている。こうした結果、入賞を目指す参加者の意欲が高まり、祭礼が発展するとともに、観光資源化、メディアイベント化も顕著にうかがえる。

第2に、山車や神輿をぶつける祭りの中には、何らかのルールに基づいてぶつける方向に変化したものがある。

森の祭りは、戦後には外部諸機関(警察・行政・学校など)より、暴力的・不法的・非教育的な祭りだとされた。そのため、警察はたびたび指導を行ったものの効果はなかった。しかし1973年の死亡事故を契機に、「練り」と呼ばれる、各町内から引き出される屋台と屋台の間でできたスペースを使って参加者たちが体をぶつけあう行事が「暴力の温床」と強く批判され問題視された。祭礼を行う側も事態を重く受け止め、事件直後に改革委員会を組織し、騒乱防止と管理体制の強化を志向した改革案を策定し、「森の祭り祭典規約」として明文化した。これ以降、森の祭りはより安全で穏やかな祭礼へと変貌した。

伏木曳山祭では、「かっチャ」といわれる山と山とをぶつけ合う行事が最大の見せ場とされ、時間と場所を決めて行われる。しかし、かつてのかっチャは、夜の曳き回しの最中に突然始まったという。このため事故が発生することもあった。1960年代以降、警察はこのような祭りのありようを問題視し、かっチャ(さらには祭り全体)を「伝統の美名にくれた悪弊」として中止するよう強く迫った。しかし、かっチャは現在に至るまで、伏木曳山祭の一番の見せ場であり続けている。かっチャも1960年代を通じて徐々に変わってきた。時間と場所が限定されるだけでなく、事前に対戦プログラムが作成されるようにもなった。そうして、1960年代には秩序だった対戦になっていき、その結果、事故の発生件数を減らすことにつながった。

福野夜高祭は、夜高行燈という行燈山車がすれ違う際、相手の行燈を引きちぎって壊すという祭礼である。いわば行燈の「喧嘩」の祭礼であるが、人と人の喧嘩はしないことが

参加者には徹底されている。この祭礼では、以前はいつ、どこで行燈がぶつかるかわからず、常に緊張感があったというが、戦後のある時期に、2日目の夜に本町通でどの町とどの町が壊し合う、というように場所と時間と対戦相手を規定した。その結果、緊張感はあるものの事故の少ない祭礼に変化していった。変化の時期は特定し得なかったが、おそらく1960年代から70年代ではないかと推測される。

となみ夜高まつりは、福野と同様に夜高行燈の祭礼であるが、こちらは行燈を正面衝突させる「突き合わせ」を行う。ここでも、以前はいつ、どこで行燈がぶつかるかわからず、常に緊張感があったというが、1980年から、場所と時間と対戦相手を決めてぶつかり合うやり方を導入した。この結果、町内の若者が結束して他町と対戦し、規則の範囲内で作戦を立てて相手を圧倒しようとする、まさに競技化というべき変化が起きた。とはいうものの、祭礼の時間制限があることもあり、トーナメント戦で最強の町を決めるというようなスポーツ化の方向に向かうことはなく、各町とも1～4回の対戦にとどまり、しかも対戦相手が固定化してきている。

これらの祭りでは、おもに1960年代～1970年代前半に祭礼のありようが変化していたことが理解できる。祭礼の中で見られる競い合いが何らかのルール(規範)にもとづいて遂行されるようになった状態を競技化と呼ぶとしたが、両祭礼とも、まさしく競技化したと指摘することができる。さらに、興味深いことに、両祭礼とも脱「暴力」化していったプロセスや時期がきわめて似通っている。

その一方、競技化を目指していない祭礼もある。角館の祭りは、18基の山車が町内を運行する過程で山車のぶつかり合いを行うことで知られている。ぶつかり合いは偶発的であり、いつどこでどこに当たるかは予想がつかない。このためぶつかり合いのルールは曖昧であり、ルールを自分の有利になるよう解釈して利用することが基本になっている。ここでは他の祭礼とは異なり、必ずしも競技化の方向を目指さず祭礼が継続していることが理解できる。

灘のけんか祭りは、神輿ぶつけと屋台の競い合いで知られる祭礼である。数万人を収容する棧敷席が設けられ、多くの観客を集めている。ぶつけ合いでは、神輿・屋台が地面についたら負けということになっているが、しかし屋台の大きさが地域により異なるため、勝敗は事前にある程度予想がつくものとなっている。従って勝敗よりも、ぶつかり合うこと自体に意義が見いだされる傾向がある。この祭礼も、現時点では競技化を志向してはいない。

このように、曳山や神輿などを他の町とぶつける「喧嘩祭」については、対戦相手、場所、時刻、ぶつかり方などを事前に決めてぶつかるというように、ルールを明確化し遵守を求めるタイプの祭礼と、そうでない祭礼があることが明らかになった。前者ではルールが成立する契機として、高度成長期に事故やさまざまな事件があり、警察や行政などの外部機関からの圧力を受けながらも、一定の決まり事を導入することにより危険性を減少し、ぶつかり合いを維持してきた。そして、一定のルールの中で人々の力を結集し、危険の少ない方法で競い合う方向へと変化した。後者の場合、転機となる事故や事件が発生しないまま現在に至っていることもあるが、「伝統」を根拠として競技化に抵抗している様相も明らかになった。

以上のように、競い合いが顕著な祭礼における2つのタイプの競技化とその有無について比較研究した結果、多くの祭礼では「暴力」を現代社会に適合させるために競技化という手段が有効であり、採点競技化も含めて競技化により祭礼が発展していること、一方で競技化しない祭礼もまた存続していることが明らかになった。次の課題は、競技化する祭礼としない祭礼を分けるものは何か、また競技化の何が祭礼を発展させるのかを明らかにすることである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

中里亮平、2019「民俗芸能研究と祭礼研究 角館のお祭りの事例から」『民俗芸能研究』66
阿南透、2018「高度経済成長期における都市祭礼の衰退と復活」『国立歴史民俗博物館研究報告』207、pp.223-251(査読有)

中里亮平、2016「誰がために山車は行く 神様、仏様、殿様、お客様」『やまぐち地域社会研究』14(査読有)

〔学会発表〕(計11件)

阿南透、2019「となみ夜高まつりにおける脱暴力化」日本文化人類学会第53回研究大会、2019年6月2日

中里亮平、2019「神輿中心の祭礼における暴力、もめごと」日本文化人類学会第53回研究大会、2019年6月2日

阿南透、2018「都市祭礼における「競技化」に関する民俗学的研究 青森ねぶた祭における審査とその影響」日本民俗学会第70回年会、2018年10月14日

内田忠賢 2018「都市祭礼における「競技化」に関する民俗学的研究 「よさこい系」イベン

ト祭りの競技化」日本民俗学会第70回年会、2018年10月14日

菊田祥子、2018「都市祭礼における「競技化」に関する民俗学的研究 灘のけんか祭りにおける勝敗」日本民俗学会第70回年会、2018年10月14日

中里亮平、2018「都市祭礼における「競技化」に関する民俗学的研究 角館のお祭りにおける本番の変化と曖昧なルール(規範)」日本民俗学会第70回年会、2018年10月14日

谷部真吾、2018「都市祭礼における「競技化」に関する民俗学的研究 森の祭りから見た「スポーツ化」と「競技化」」日本民俗学会第70回年会、2018年10月14日

中里亮平、2017「戦う祭礼 非日常における身体と正しい振る舞い」現代民俗学会「戦う身体民俗学」2017年9月30日

中里亮平、2017「綱引きからみるスポーツと民俗の間」現代民俗学会「競いの光景 祭礼・芸能・スポーツを研究を展望する」2017年12月17日

谷部真吾、2017「批判されるけんか祭り 高度経済成長期の伏木曳山祭(高岡市)を事例として」日本民俗学会第69回年会、佛教大学、2017年10月15日

中里亮平、2015「誰のために山車はいく-神様、仏様、殿様、お客様」日本民俗学会第67回年会、2015年10月11日

〔図書〕(計6件)

阿南透・萱岡雅光、2018「となみ夜高まつり 魂を焦がす炎の祭り」阿南透・藤本武編『富山の祭り』桂書房、pp.115-130

谷部真吾、2018「伏木曳山祭 熱狂と信仰と」阿南透・藤本武編『富山の祭り』桂書房 pp.79-94

菊田祥子、2018「女が創る祭の見せ場 千葉県匝瑳市八日市場の八重垣神社祇園祭を事例として」松崎憲三先生古稀記念論集編集委員会(編集)『民俗的世界の位相 変容・生成・再編』慶友社

中里亮平、2018「祭礼(たち)の明治維新」『江戸 明治 連続する歴史』藤原書店

中里亮平、2018「新しい祭礼研究にむけて 2つの世間と現代民俗学」『現代民俗学のフィールド』吉川弘文館

中里亮平、2018「民俗語彙の現代的意義 民俗学と翻訳を拒むもの」『縁』12号、pp.27-33

〔その他〕

シンポジウム・講演等

阿南透、2018「日本・世界に広がるねぶた」青森公立大学公開講座「ねぶた学」、アウガ(青森市)、2018年11月1日

阿南透、2018「夜高行燈の魅力」となみ散居村学習講座、となみ散居村ミュージアム、2018年6月23日

阿南透、2018「となみ夜高まつり 魂を焦がす炎の祭り」シンポジウム『富山の祭りの魅力を探る』富山県民会館、2018年3月4日

谷部真吾、2018「伏木曳山祭り 熱狂と信仰と」シンポジウム『富山の祭りの魅力を探る』富山県民会館、2018年3月4日

6. 研究組織

(1) 研究協力者

研究協力者氏名：内田 忠賢、菊田 祥子、中里 亮平、谷部 真吾

ローマ字氏名：UCHIDA Tadayoshi, KIKUTA Shoko, NAKAZATO Ryohei, YABE Shingo

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。